



## ロシア・オスマン帝国関係資料 Russian-Ottoman Relations

完全買切型 (次年度以降の追加費用は発生しません)

言語: ドイツ語、フランス語、英語 他 原本所蔵: National Library of Russia in St. Petersburg

### Part 1: The Origins, 1600-1800

### Part 2: Shifts in the Balance of Power, 1800-1853

### Part 3: The Crimean War 1854-1856

### Part 4: The End of the Empires, 1857-1914

価格はお問い合わせください

20 世紀まで続いたロシア＝オスマン帝国間の戦争とそれにつづく国境の再画定を中心とした資料を  
集成したトルコ・ロシア・中東の激動の歴史資料コレクション。

17 世紀から 19 世紀にかけて、ロシアとオスマン帝国との力関係はつねに西欧諸国の注視的であり、  
西欧諸国のなかにはオスマン帝国領内の地域に野心を抱いている国もありました。とくにドイツ  
とフランスでは、ロシア＝オスマン帝国関係に影響を受け、またそれに影響することを狙った多種多  
様な報告書や意見、計画があらわれました。そのなかには、例えば、政府の文書や外交報告書、旅行記など、  
それまで比較的知られていなかった地域について詳細な情報を記したものや、民衆の支持をロシア、あ  
るいはオスマン帝国に向けるためのきわめて政治的、論争的なパンフレットなどがあります。

#### ロシアとオスマン帝国について

13 世紀にモンゴル人はアジアの大部分を寇略しましたが、その燼灰のなかから新しい国家が次々と  
誕生しました。モスクワ大公国が 1480 年前後に独立し、中央政府を樹立して勢力を広げると、すぐに  
各地に諸公国ができていきました。16 世紀までは、ロシアは領土の拡張を北方のみに集中していまし  
た。一方、オスマン帝国は西方のバルカン半島まで領土を拡大し、つづいて東方の、歴史的にイスラ  
ムの中心地であった地域まで勢力を広げ、ロシアとオスマン帝国境を接するようになりました。

1569 年に最初のオスマン＝ロシア間の戦争が勃発しました。ロシアの解放軍によって包囲網は破られ、  
オスマン帝国軍は退いたものの、アストラハンの一部は破壊されました。2 年後にモスクワが、クリミア  
タタール人 (そのハンはおスマン帝国の封臣の一人) の手によっておなじ運命にさらされましたが、結  
局、オスマン帝国の北方への領土拡大の野望は 1572 年のモロディの戦いでロシアに阻まれました。オ  
スマン帝国の北方への野望は早い段階でくじかれたものの、ロシア側のオスマン帝国領への野心はま  
すます強まっていきました。

(De Gruyter Brill (Brill), NLD Primary Source / 丸善雄松堂)

\*裏面もご参照ください

G.C.19252, 19253, 19254, 19255

ご契約の際は、所属機関の IP アドレスが必要となります。 FTE は問いません。同時ユーザー数は無制限です。

●掲載製品はリバースチャージ対象製品です。

●原価の改定、為替相場の変動などの理由による価格の変更や掲載タイトルの変更につきましては、予めご了承の程お願い申し上げます。

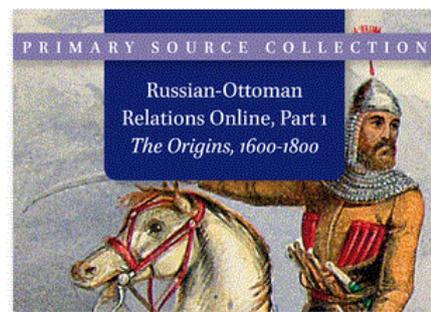
●お見積もりは、別途ご用命ください。

**M MARUZEN-YUSHODO**

丸善雄松堂株式会社[学術情報ソリューション事業部 企画開発統括部]

e-mail: e-support@maruzen.co.jp

# Russian-Ottoman Relations



## ◆Part 1: The Origins, 1600-1800

タイトル数：193

17世紀には、オスマン帝国はバルカン地方と、クリミア・ハン国がスルタンの支配権を認めた黒海北岸まで、広く勢力をのび、ヨーロッパと中東の政治においてロシアは重要性を増していました。オスマン帝国の最初のロシア遠征は1569年に行われました。その後の数世紀にわたって、両国の紛争と衝突は劇的にその数を増しました。1677年から1681年にかけてはウクライナをめぐる争いがおき、4年後には、ロシア皇帝は神聖同盟に参加してスルタンに対する戦いに加わり、1689年にクリミアに攻め込みました。両国の間には幾度か条約が結ばれ、例えばカルロヴィッツ条約に続く1700年の講和条約や、オスマン帝国軍がロシア皇帝ピョートル一世の軍を破った1711年のプルト川の戦いの2年後に結ばれた講和条約などがあります。

オスマン帝国とロシアとの対立関係は18世紀に入っても治まる気配を見せず、1736年から39年にかけて、1768年から74年にかけて交戦状態にあり、1787年にも戦火を交えました。1774年に結ばれた、悪名高いクチュク・カイナルジ条約により、オスマン帝国はロシアの勢力下におけるクリミアの独立と、黒海北岸の地域の独立をむりやり承認させられました。1792年のヤッシー条約締結まで、オスマン帝国とロシアとのあいだに平和が構築されることはありませんでした。

## ◆Part 2: Shifts in the Balance of Power, 1800-1853

タイトル数：120

本コレクションには、1812年のブカレスト条約や1829年にアドリアノーブル(エディルネ)和約などの外交交渉や、黒海に関する商業・軍事問題、戦場での見聞録、将来の対立を予見した計画や見解などの資料が収められています。種々多様な視点が収められている点は、本コレクションの特別な魅力の一つと言っていいでしょう。

## ◆Part 3: The Crimean War 1854-1856

タイトル数：372

クリミア戦争は、イギリス、フランス、オスマン帝国の連合軍とロシアとのあいだで戦われた戦争です。主戦場は黒海に位置するクリミア半島でしたが、その影響はさまざまな方面へ波及しました。

本コレクションに収めた資料のなかで、ロシア側の見解を代表するものに、旅行家であり芸術の保護者であったAnatole Demidov (1812-1870)の著作や、もと外交官のTchihatchefによる平和に関する議論、ロシア軍の退役軍人であるPiotr Andreevich Viazemsky (1792-1878)の文書などがあります。二人のトルコ軍将校、Rustem EffendiとSeid Beyの意見や、アルジェリアの詩人Muhammad b. Ismail (1820-1870)のクリミア戦争に関する見解なども収めています。イギリス側の見方については、ロシアに対して熾烈な敵愾心を燃やした外交官、David Urquhart (1805-1877)の強い影響力をもっていた著作がよく代弁していますが、他にももっと穏健な出版物も収録しています。

## ◆Part 4: The End of the Empires, 1857-1914

タイトル数：263

オスマン帝国は19世紀の後半にかけてますます勢力を失っていきました。スルタンは外圧に屈するかたちで、1856年に非ムスリムの臣民に利益となる大幅な改革を布告しました。それから20年たつうちに、オスマン帝国の経済は破綻し、外国の銀行に経済を支配されるようになり、オスマン帝国をよそにして、西欧諸国は、オスマン帝国をなんらかのかたちで維持すべきか、それとも分割すべきか勝手に議論するようになりました。

Russian-Ottoman Relationsの最後のパートである本パートに収録されている資料も、これまでとおなじく、きわめて多彩かつ多面的です。商業を扱っている資料もあれば、オスマン帝国やロシアの政治家の人物像を描き出す資料もあります。個人的な文書もあれば、論争やプロパガンダを目的とした文書もあります。本コレクションは、これまでまとめて出版されたことのなかった一次資料の宝であり、個人の見解や軍事分析、国内政策や国粋主義的な政策の表明などが豊富につまっています。